

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名

寺井 雅人

論 文 題 目

Activation of Color Information in Second Language Comprehension
(第二言語理解における色情報の活性化)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	山下 淳子
委員	名古屋大学教授	杉浦 正利
委員	名古屋大学准教授	三輪 晃司

論文審査の結果の要旨

本論文の概要

本研究は第二言語の単語理解に関する研究である。第二言語学習者が単語を文中で読んだ時、どのような意味を心的に表象するのか。その表象は母語話者と同じか違うか、そして第二言語の熟達度により生成される意味表象は変化するのか。これらは、第二言語理解研究において重要な課題である。しかし、これまでの研究の多くは単語の形式面（音韻、書字）の処理に焦点を置き、より深い理解である意味表象を扱うことは少なかった。本論文は、この比較的未開拓の領域を対象とし、第二言語習得研究やバイリンガル研究分野で提案されている語彙習得モデルと認知心理学の身体化認知研究の枠組みを用いて、意味表象の中から色に焦点を置き、色情報の活性化という視点から、第二言語理解とその発達を研究したものである。本論文は7章で構成されており、論文本体以外に、予備調査の結果、実験項目、統計解析ソフト R による分析スクリプトとその詳細な出力結果など、13種類の資料が付されている。

まず序論となる第1章で本研究の背景、目的、論文の構成を述べ、第2章で本研究の理論的背景と実証的な先行研究をレビューし、本研究で扱う7つの研究課題およびそれらに対応する仮説を論じている。第3章は、本実験の実験項目を作るために行った2つの予備実験とその結果を報告している。第4章と第5章は、意味ストループ課題を使った本実験とその結果を報告している。この課題では、まずターゲット語が埋め込まれた文が提示され、その後、ターゲット語（例：クマ）が、典型的な色（茶色）、非典型的な色（白 [シロクマ]）、ありえない色（緑）のどれかで表示される。参加者はまず文を読み、その後提示されたターゲット語の色を答える。ターゲット語の提示から色を答えるまでの反応時間を計測し、色が心的に表象されていれば反応が早くなるというロジックに基づき、色の活性化を検証している。第4章は母語話者を対象にした実験1で、日本語母語話者には日本語で、英語母語話者には英語で刺激文を提示し、母語で文を理解する時の色の活性化を検証している。これは、日本語母語話者が英語で同様の課題を実行する時のベースラインを確立するためである。さらに、先行研究が扱わなかった、色を示唆する文脈の位置により色の活性化が影響されるかという新しい課題も設定し、射程を先行研究より広げている。結果は、日本語母語話者、英語母語話者とも、文理解でターゲット語の色を活性化していること、文脈の位置は結果に影響しないことが示された。これを受けて、第5章の実験2では日本語母語話者に対して英語で意味ストループ課題を行い、第二言語理解における色の活性化を検

論文審査の結果の要旨

証している。その結果、熟達度が高くなると、色が活性化されることが示された。文脈の位置効果は学習者にもなかった。加えて、母語、第二言語に共通して、赤は他の色より活性化されやすいことが示唆された。第6章では、第4章と第5章の2つの実験をまとめて総合的な考察を行い、本研究の限界と今後の展望を述べている。最終章の第7章では論文全体をまとめた後、色情報にとどまらず言語理解における非言語的情報の表象についてさらなる研究が重要であることを強調して論文を締めくくっている。

本論文の評価

2023年2月2日に博士学位審査口述試験が行われた。論文著者は、明確な例を提示しながら、理論背景と主要な結果をわかり易くまとめ、様々な質問に対して、丁寧にかつ的確に回答した。本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- (1) 先行研究が比較的少なく、未知の要素が多い語彙の意味理解の領域に挑み、複雑な意味概念の中から実験上の統制が比較的取りやすい色というトピックを選ぶという研究課題の絞り方、証明こそされなかったが、文脈の位置効果の影響を思いつく発想力、そして身体化認知研究という枠組みとその手法を効果的に援用して、緻密かつ堅実な実験を遂行する計画性と実行力など、研究者としての基礎を十分に積み、これからの将来性を感じさせる内容となっている。
- (2) 本論文では、母語話者のベースラインを取る位置づけとなるが、英語母語話者を対象とした研究を日本語母語話者に行うことで、第二言語習得研究だけでなく、母語の言語処理研究にも貢献する論文となっている。
- (3) データ分析は妥当であり、統計分析上の知識・技能と結果を可視化し明瞭に表現する力を示している。赤という色が活性化されやすいという、本研究の研究課題を超える発見も、実験項目の特徴を丁寧に分析するなかで見いだされたものであり、その綿密な分析力は高く評価できる。
- (4) 母語話者のベースラインを収集し、第二言語熟達度をデータ分析に入れたことで、第二言語習得研究において色情報の心的活性化の発達を示した初めての研究事例となり、第二言語の単語意味理解研究を確実に一步前進させたと言える。

論文審査の結果の要旨

一方で、次のような課題も指摘された。

- (1) 関連する様々な研究分野を統合しているため、分野により用語の定義がずれる場合があり、ある分野の用語が他の分野の研究者には分かりにくくなることがある。その傾向がこの論文にも見られた。関連分野でありながら違った研究背景を持つ読者を想定して、分野により定義がずれる恐れのある用語の使用についてより慎重な対応が必要である。
- (2) 活性化、反応のメカニズムなど、結果だけでなく心的プロセスを説明するモデルがあるとさらによかった。
- (3) 色を示唆する文脈となる表現の位置効果を思いついたのは良いが、その表現の位置を変えることで、ターゲット語とその表現との距離が変わってくる。その影響についても考慮すべきであった。
- (4) 赤についての発見は興味深いが、その説明原理については十分な議論が見られなかった。

しかし、これらの指摘は今後研究をいっそう発展させるための課題であり、本論文が博士論文として高く評価できることに疑念の余地はない。

以上により、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位に値するものであると判断した。

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨